特集　本学会の「沖縄精神科医療委員会」活動の検証――50年が経過して――

派遣医を受け入れた沖縄の当時の状況と現在

中山　勲

戦後の沖縄の著しく遅れた精神科医療を支援するために日本政府は精神科医を派遣することに決め，それに協力して医師を安定的に派遣するために日本精神神経学会に沖縄精神科医療協力委員会（のちに沖縄精神科医療委員会と名称を変更）が設置された．のべ83名の派遣医が沖縄の精神科医療の発展に尽力した功績は大きい．派遣医の一人だった島成郎は沖縄に居を定め，前後20年間にわたり精神科医療に従事し，沖縄の地域精神科医療の基礎を築き，ノーマライゼーションの実践に努めた．

＜索引用語：派遣医，沖縄精神科医療協力委員会，島成郎，地域精神科医療，ノーマライゼーション＞

はじめに

第二次世界大戦の末期，1945年の3月から6月にかけて沖縄は米軍の艦砲射撃や空爆，それに続く地上戦により多数の県民が死傷し，自然も生活基盤も徹底的に破壊された．戦後，廃墟と化した故郷の土地の上に生活が始まった．米国の統治下に置かれて27年間本土から切り離され，復興は遅れた．精神科医療は最も遅れ，精神障害者たちは街を放浪し，あるいは監置された．そのような悲惨な沖縄の精神障害者たちに助けの手を差し伸べたのは日本精神神経学会であり，のべ83名の派遣医であった．

Ⅰ．派遣医と私

私は派遣医についての感想を述べることしかできない．沖縄県出身の私が母校の徳島大学精神神経科医局で4年余の研修を積み，郷里の財団法人沖縄精和病院に就職したのは1969年10月であり，派遣医制度が発足してすでに5年9ヵ月が経過していた．その後沖縄精神科医療委員会の現地委員の一員にもなったが，委員会の歴史や体制の詳細は知らない．

沖縄でも委員会が開催されて参加したことがあるが，派遣医から現地の受入体制への不満や沖縄精神科医療委員会へのイデオロギー的な批判もあり，援助されることの難しさを感じた．いろいろな困難を乗り越えて1964年1月から1975年3月まで，のべ83名の派遣医を沖縄県民のために派遣していただいた日本精神神経学会のご尽力に対して衷心からお礼を申し上げたい．

沖縄精和病院には，林直行，中川善資，島成郎，藤沢敏雄，高柳功，宮本侃治，平山浩，中村豊，松本秀夫，伊藤祐台，樋田精一，丸山信之，豊田純三，高橋信介の14名が派遣医として勤務され，島成郎先生は2度勤務されている．私は，中村豊先生の派遣期間の終わりの頃に沖縄精和病院に就職したので私が接した派遣医は8名である．

私が身近に接した派遣医はいずれも勤勉で使命感をもって広い視野から医療活動を行い，深い感銘を私に与えた．その後の私の医療活動へ影響を与えたことは間違いないと思う．

著者所属：医療法人宇富屋玉木病院/沖縄県精神保健福祉協会

Ⅱ．宮古島の精神科医療と派遣医

1967年2月，専任医師不在のまま琉球政府立宮古病院精神科病棟が開設した．同年2月から5月までは琉球精神病院から上与那原朝常医師と新垣元武医師が出向して医療にあたった．その後，1967年5月から1972年1月まで，派遣医が診療を引き受けた．大嶺繁二，岡庭武，蜂矢英彦，久場兼功（琉球精神病院），村井靖児，赤須東淑，山上龍太郎，畑俊治，赤松亘，小林晋，小沼杏坪，高橋正和の12名で，大嶺繁二医師と村井靖児医師は2度勤務している．

1970年に琉球政府立八重山病院に精神科病棟が設置されたが職員不足のため1973年まで開棟が遅れた．宮古島の派遣医は八重山島の精神科医療も引き受けることになった．

すなわち彼らの業務は，①宮古病院精神科の入院・外来患者の診療，②宮古保健所管内の巡回診療，③八重山保健所の出張外来診療，④八重山保健所管内の巡回診療，⑤宮古・八重山両保健所管内の精神障害者の実態把握，⑥関連諸施設医療職員の教育・指導などであった．

1972年5月15日に沖縄が本土復帰して沖縄県となり，1973年5月1日に財団法人沖縄精和病院が県に移管されて沖縄県立精和病院になった．同日，私は県立宮古病院へ転勤した．私は宮古島でただ一人の精神科医として50床の病棟で常に満床の入院患者の診療と外来患者の診療を行い，毎週半日は保健婦と一緒に宮古保健所管内の巡回診療を行った．年に2回は多良間島へ行き，一泊の巡回診療も行った．そのような医療活動が当然の宮古島での精神科医療のやり方だと思い行動していたが，それは全て派遣医の作り上げたものであったとはそのとき知る由もなかった．ともかく私は宮古島で地域精神科医療の一端を学んだ．

Ⅲ．島成郎の地域精神科医療活動の実践

島成郎は，1968年に初めて派遣医として沖縄精和病院に着任し，その後精和病院にもう1度，那覇保健所に2度勤務し，派遣医として4度沖縄に来ている．そして自分の精神科医療の実践の場を沖縄に決めて，1972年7月に玉木病院を玉木正明医師が開設すると同時にそこの常勤医となった．

彼が沖縄での精神科医療を思い立ったのは，1968年に初めて派遣医として勤務したときのことである．沖縄本島の北部地区の巡回診療に参加したが，そこで地域住民から「公看さん」と親しみを込めて呼ばれている駐在保健婦たちの献身的に働く姿をみて，彼女たちと一緒に地域精神科医療を実践したいと思ったという．彼は玉木病院に勤務し，同時に那覇保健所の嘱託医となり，めざましい地域精神科医療活動を行った．

彼は病院においては可能な限り開放化を追求し，またできる限り強制入院を避けることを基本とした．彼のカルテには精神症状よりも患者ができることの記載が多いのに驚いたと，ある医師が述懐している．異常な部分より正常な部分に目を向けていたのだろう．彼は1971年の那覇保健所の派遣医の頃から所内クリニックを開設し，精神科病院受診には抵抗を示すが保健所相談には応じる患者の診療を行い，管内市町村の巡回診療を行った．また地域精神科医療実践のモデル地域として久米島を選び，1971年から3ヵ月毎に3，4泊の日程でクリニックや巡回診療，未治療患者の訪問など行った．同時に患者や家族，民生委員，役場職員，区長などが参加するスポーツ大会やレクリエーション大会など行った．玉木病院に勤務後は入院中の久米島出身の患者を職員同行で外泊させ，那覇保健所の活動に合流させ，島の人々との交流を図った．回を重ねる毎に，はじめは閉居して交流を拒絶していた島の患者たちも生き生きと参加するようになった．

夜は島先生を囲んで患者家族，保健婦，役場職員，民生委員たちがともに酒を酌み交わしながら懇談を行った．そのような中から1979年に沖縄県で最初の精神障害者家族会「あけぼの会」が結成された．現在，沖縄県の精神障害者家族会は16ヵ所に増えている．

1983年に那覇保健所で始められた「心の輪を広げる集い」も島先生の特筆すべき功績である．那覇保健所管内の12市町村に協力を呼びかけて，管

内の多くの精神科病院に入院中の患者や通院患者，家族，保健所職員，病院職員，各市町村の職員，福祉事務所ケースワーカー，民生委員などを学校の運動場や広場に集め，1日をスポーツやレクリエーションを楽しみ，交流を図るというものである．運動場には各市町村のテントを設営し，どの病院の入院患者も通院患者も自分の市町村のテントに集うことにより，患者や家族，役場の職員の親しい交流が生まれた．同じような「集い」は，その後県内の各保健所管内や市町村単位でも行われるようになった．

1973年に島成郎の呼びかけで始まった那覇保健所での月1回の「精神医療勉強会」はユニークであった．勉強会に参加するメンバーは，精神科医，精神科看護婦，ケースワーカー，心理士，作業療法士，保健婦，精神保健相談員，福祉事務所職員，知的障害者施設職員，婦人矯正施設職員などの多くの職種が含まれていた．これは精神科医療は多くの関係機関や関係する職種との連携で行うことが望ましく，効果的であるという彼の考えに基づくものであったと思われる．

彼がめざしたことは，孤立している精神障害者を再び家庭と社会につないでいくことであり，そのためには家族も社会全体も精神科医療に参加してもらうことだった．それを地域精神科医療の理想として彼は沖縄という地を活動の場所として選んだと思われる．わが国の精神科医療にノーマライゼーションという言葉が普及する以前に彼はそれを実践した．私は島成郎を沖縄精神科医療委員会の精神の体現者であると思う．

Ⅳ．派遣医を受け入れた沖縄の当時の状況と現在

派遣医制度が開始された1964年当時と2015年現在の沖縄の精神科医療の状況を簡単に比較してみたい．それは50年前と現在の精神科医療資源の比較である．精神科病院は6ヵ所から25ヵ所に増加している．精神科病床は668床から5,475床（人口万対39.6）に増加．精神科医は10数名から387名（指定医224名）に増加．精神科クリニックは0から56ヵ所に増加．1964年当時，沖縄には精神保健福祉センターはなかったが，1969年に財団法人沖縄精神衛生協会立精神衛生相談所が設立され，それが1972年に沖縄が本土復帰した2年後の1974年に県に移管され，沖縄県立精神衛生センターになった．1998年6月1日，精神科救急医療システムが開始された．2001年6月1日，精神科医療関連18団体の加盟により沖縄県精神保健・医療・福祉連絡協議会（連絡協）が設立された．2006年4月1日，連絡協の活発な要請運動により県立南部医療センター・こども医療センターに5床の精神科身体合併症病棟が設置され，2007年4月1日から診療開始となった．

上述のごとく，50年前の沖縄の貧困な精神科医療資源は飛躍的に発展し，現在は本土の水準に接近しているものと思われる．これも1964年1月から1975年3月までの足かけ12年間にわたりのべ83名の派遣医を送り続けた日本精神神経学会の努力が基礎になっていると考えられる．

おわりに

今回私に与えられたテーマは「派遣医を受け入れた沖縄の当時の状況と現在」であるが，私に正確・詳細に報告する力はなく，感想を述べたにすぎない．それさえも思い違いがなきにしもあらずであり，その点ご寛恕を乞う次第である．

なお，本論文に関連して開示すべき利益相反はない．

謝　辞　私に発表の機会を与えてくださった日本精神神経学会に心からお礼を申し上げます．

Background of Okinawa's Acceptance of Dispatched Physicians and Its Current Status

Isao NAKAYAMA

Tamaki Hospital
Okinawa Mental Health Welfare Association

In response to the Japanese government's decision to dispatch psychiatrists to Okinawa to improve a significant delay in the establishment of psychiatry there following World War II, the Okinawa Psychiatric Care Cooperation Committee (former Okinawa Psychiatric Care Committee) was established by the Japanese Society of Psychiatry and Neurology to ensure the stable dispatch of physicians. A total of 83 psychiatrists were dispatched to Okinawa, and they markedly contributed to the development of psychiatry in the prefecture. Shigeo Shima, one of the physicians dispatched to Okinawa, decided to stay there, and provided psychiatric treatment for twenty years. He established a basis for and promoted normalization in Okinawa.

＜Author's abstract＞

＜**Keywords**：dispatched physicians, Okinawa Psychiatric Care Committee, Shigeo Shima, community psychiatric care, normalization＞